

小原國芳の道德教育

— 一 考 察 —

A Study of Moral Education of Dr. Kuniyoshi Obara

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

目 次

- はじめに
- 一 道德教育の根本問題
 - 1. 人生観
 - 2. 人生の目的と人格価値
 - 3. 道德とは何か
 - 4. 善とは何か
- 二 道德と宗教の関係
- 三 道德教育の目的
- おわりに

はじめに

小原國芳という信仰を持ち、熱意に溢れ、偉大なる実践力、実行力を備えた人物が一世一代で築き上げた玉川学園は今年、記念すべき創立50周年を迎え、数多くの行事が年間を通して計画され、実施されている。

さて人生70年といわれる今、91才でその生涯を閉られるまで教育に熱意を傾け、身を挺してこられた小原國芳を想う時、私は彼をこれほどまでに教育に駆り立てたものは何なのだろうかと考えざるをえない。同時に、私は、私自身はいったい何のために生きているのだろうかを考える。自分のいのちをかけるものを獲得しているのだろうかと反省した。生きるということは人それぞれに楽しみがあり、苦しみがあり、諸々の問題をかかえているであろうが、何を支えに、あるいは何を拠り所として生きているのだろうか。ある人は子どもを支えとし、ある人は仕事や研究を支えとし、ある人は愛する人のためにと思い、ある人は宗教を支えに生きているのだと思うが、そのようなことを考えることなく日々流されるが如くに人生70年のその瀬戸際まできてしまっている人もいるのではないだろうか。

私は、小原國芳と出会うことによって、これまで彼の宗教教育、教育勸語に関する考え方、そして労作教育について学んできた。そして今、私は彼が日常生活において必要な道徳、規範をどのように考え、指導したかを研究しようとしている。

道徳教育は宗教教育と同じ様に人間の根本に関わるものであるから、おいそれと把握できるものではないと思う。それにもかかわらず、「盲蛇に怖じず」の譬のように取りかかり、問題の巾広さ、そして深遠さに驚き啞然としてしまったが、「道徳」の中の「道」だけかもしれない。あるいは「徳」だけになってしまうかもしれないが、一歩ずつ歩みを進め、探り出す努力をしようと思う。

道徳の問題を取り上げたもう一つの理由は、労作教育について調べていた際に、ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner 1854-1932) が彼の著書『労作学校概念』の中で次のように言っていたためである。即ち、「生産的労作はその一面に心の活動を伴い、精神的労作と相俟って単なる精神的労作による以上により高い心的生活の統一を形成するために役立つところの、新しい表象を創り出す。生産的労作の高い教育的意義はここにある。これは人間の諸力を永遠的に活動させ、緊張させ、練習させるためのはげみとなり、勤勉、忍耐、奉仕、誠実などの諸徳を促進させる。要するに意志陶冶、性格陶冶に役立つ。」^①と。このように労作が道徳を身につけるために非常に役立つ、また必要な条件であることが述べられている。

宗教の世界に到達するために労作が必要であり、労作を行なうことによって道徳に必要なものもまた会得され、道徳は宗教へと到達するというこの三つは相関関係にあるのではないかと考えたのである。

この三つ、宗教、道徳、労作は教育の根本を支えるものでもあると思うのである。

『労作学校概念』でケルシェンシュタイナーは次のようにも言っている。「あらゆる教育の究極の目標は道徳的に自由な、自律的な人格を育成するにあつて、しかも要求と相並んで、道徳的に自由な協同社会の建設が期せられているべきである。」^②

当初、私の第四の研究課題は小原國芳の信仰に迫るものであったが、そこへ到達するためには、まだまだ課題が多く、今回は彼の説く道徳教育の根本問題を一般的な道徳観、キリスト教的道徳観との比較において探ってみようと思う。そのことによって、その中から自ずと彼の信仰の核心へと近づければ幸いと思う。

① ケルシェンシュタイナー著原著名“Begriff der Arbeitsschule” (1912), 東岸克好訳『労作学校概念』玉川大学出版部 昭和53年版 22頁。

② 同上書14頁。

一. 道徳教育の根本問題

人は一人では生きていけない。人はその文字が示すように人と人との人間関係の中にあってはじめて人間となり、人間関係すなわち社会関係の中であって生きていくことができるのである。その社会関係、社会生活を保持するためには秩序が必要であると思う。その秩序こそが道徳にほかならないのではないだろうか。その社会生活上の秩序を守るこのために道徳教育が必要になってくるのである。

小原國芳は言う。「道徳教授において最も重大なことは、実に一々の徳目に対する正鵠なる見解を有することである。方法上の問題は、瑣木なことである。一々の解釈が違っていたら何にもならない。ならないのみならず、有害である。そのためには倫理も哲学も、宗教も文芸も社会事相も研究して欲しい。そして人生の新しき地図を早く見きわめて欲しい。『盲人が盲人を手引きする』というが、人生の酸いも甘いも、百般の事相に通じ、真にリップス教授 (Lipps, Th. 1851~1914) の主張した人間通 Menschenkenner になることを心掛けなければ到底生きた道徳教授は出来まい。何より怠務である。」^①

道徳教育の根本問題を考える時、まず第一に社会生活を守るために一人一人がいかにか生きるべきかというしっかりした人生観をもたなければならないであろう。

1. 人生観

小原國芳の人生観には四つの代表的なものがあり、それはそれぞれの人の見方によってそれによって悲しい人生にも、楽しい人生にもなるのだといている。

「厭生観、楽天観、厭生的進化論、超越的楽天観。しかし、この人生観の観ということ、悲しく観たり、嬉しく観たり、観るのは誰であるか。人生が苦であるとか楽であるとか言うのは、どういう所からこれを見るのであるか。何を以って見るのであるか。問題はそこです。

苦しい憂き世と、楽しい有喜世。それはいうまでもなく自分で観るのです。自己というアプリアオリから必ず見るのです。宇宙すべて自己の表現です。吾々が物を見るにはどうしても自分という立場をのけることは到底出来ません。必ず自己という仮定、立場、アプリアオリが必ずあります。リップスの感情移入というのがそれです。自己の感情を対象に投入して観るのです。自己の表現です。自己を以て見るのです。ですから深い高い広いホントの自分を作り上げることが大切です。やはり教育は、『自己深化』だと思えます。やはり私たちは聡明なる知恵と、修行で鍛えあげた信念と、不屈不撓の勇氣とが必要だと思いま

① 小原國芳著『道徳教授の実際(1)』玉川大学出版部 昭和50年版 33頁。

す。各人は各人の運命の開拓者なのでですから運命は内から働くのです。明るく、強く、美しく、聖く、人生を見て行こうではありませぬか。

子供というのはいつのまにか親なり教師なり先輩なりの人生観に支配され、その中に入っております。自分のためにはもとより、子供のためにも広く、正しい、大きい、強い、純な人生観を持ちたいものと念願します。」^②

私たちは第一の厭世的に人生を観てしまつては自分を見失なってしまうし、第二の楽天的に観て人生の深遠さを知らなければ人生は浅薄なものになってしまうのではないだろうか。また第三の厭世的進化論的に観ていけば、現在をおろそかにしがちである。そこで第四の超越的楽観はどうか。これは基督教などの立場である。人それぞれが極端に走ることなく、自己を深めることによって確かな人生観を会得できるものとなるだろうが、そのためには、教師が子供たちの中に育まれた人生観をより正しく、明るく、深みのあるものに導いていかなければならないのではないだろうか。

2. 人生の目的と人格価値

何のために生きるのか。小原國芳は端的に「人生の目的は自己の本領を発輝することである。」^③という。「自己の本領と言うのは何であるか？他人とはどうしてもかけがえの出来ない。その人ならではのならぬもの、それがその人の本領です。個性、人格、人格価値。

このたった一人——永劫に——かけがえのない処に、個性に、特殊に、特に、吾人の尊さがあります。

実に、世に導きものはこの唯一の精神の発露です。世に愛すべきは個性の天真爛漫流露して天下に一つあって二つなき特殊です。世に最も卑しむべきは自己を失なえるものです。実に個性なければ万物もない。神は決して無意味に無限の特殊を作り給わない。このかけがえのない独特に吾人の使命はある。

この自己の特性を覚り天神を信ずるのを自覚といいます。

然らば如何にして使命を覚知し大自然を得能うか。これは神を知ることによってのみ生れて来ます。

神を知る事は真の自己を知ることである。真の自己とは宇宙の本体である。真の自己を知れば宇宙の本体と融合し神意と冥合する。宗教も道徳もここに尽きるのです。そして真の自己を知り神と合する法はただ我々の偽我を殺し尽して一度この世から死んで後蘇ることです。第一義生活の発揮です。

② 小原國芳著『道徳教授革新論』玉川大学出版部 昭和53年版 34～37頁、『母のための教育』玉川大学出版部 51年版 172～175頁、『道徳教育』玉川大学出版部 44年版 170～178頁。

③ 小原國芳著『道徳教育』玉川大学出版部 44年版 182頁。

人生の目的が吾々の教育の目的と大関係があるのです。人生の目的は同時にそれが教育の目的です。人生の目的が分らずに教育は絶対に出来ぬ筈です。

教育の目的は児童の個性を發揮させることです。」^④

私たちは時折、自分というものが無限のものであるかのように錯覚し、又、他の人たちをみんな同じ人間であるというおおざっぱな見方で見てしまいがちである。自分が有限の人格を持った人間であり、私はこの世では私一人なのだということをも忘れがちである。このことに気づくこと、何時^{いつ}気がつくかがその人の人生を大きく左右するのではないだろうか。自分が一人しかいないと同様に両親も友人もその人その人がかけがえのない一人一人であり、それぞれの使命をもって生かされているということに早く気づかなければならぬのではないか。お互いが大切な個性をもった人格であることを認め合い、尊重し合って、生きていかなければならない。人々が互いに助け合って、有機的に結ばれる時、それぞれの多様性が保存され生かされるのである。固有の立場、固有の能力で、ともに苦しみともに喜ぶ時に、社会の連帯性が生かされるのである。また、私たちが個性をもった自分であることに固執せずまわりの人たちのために生きようとする時、その人は自由になることができる。それはさらに社会関係の成長ともなり、翻って、その人をその人ならではの人格としての価値をもつことになるのである。

しかし、私たちはまわりの人たちを大切にする時に、私を、そしてすべての人たちを兄弟であると思う時に、私たちの創造者がある、父なる神を認めざるを得なくなるであろう。キリストの教えは、神に対する人間の道を説くだけではなく、人々に対する私たちの姿勢を説いているのである。神を知る時、私たちは自分が生かされていることを自覚し、その生きていることの大切さを理解するのである。小原國芳も言っているように、私たちの生きる目的は神を知り、まわりの人とともに、そしてその人々のために生きることなのではないだろうか。

3. 道德とは何か

一般的に道德はどのように解釈されているのだろうか。

道德とは『易経』^⑤ や『礼記』^⑥ などにもすでに見られる古い用語である。……ともかくも人間として人間らしいあり方、というほどの意味に違いない……近代倫理学にいたっ

④ 「革」37～42頁、「母」175～182頁、「道」182～187頁。

⑤ 儒教の經典の一つ。単に『易』ともいい、また周代に完成したから「周易」ともいわれる。日本には5世紀に渡来している。(『万有百科辞典4, 哲学, 宗教』小学館 昭和49年版 62頁)

⑥ 儒教の根本經典の一つ。周の末から秦、漢時代の諸儒の古礼に関する説を集めたもの。(小学館 同上書 600頁)

てはじめて、道徳は個我の尊厳なる人格の信念という形にしばられ、ようやく習俗を乗り越えた純粹の道徳として打ち出された。^⑦とある。人間として人間らしいあり方とはどういふあり方を示すのであろうか。

間瀬正次^⑧は『実践的道徳教育』の中で、「倫理学の立場からは、『道徳』という概念は道と徳との要素から構成されており、道は普遍妥当的な道理を意味し、徳は得なりで道理を体得することを意味する。東洋では『徳は得なり、身に得るなり』で、道理を体得すれば徳と福との一致ができて望ましい人間が期待される。また西洋では徳は人間の人間としてのよさや優秀性を意味し、徳のある人とは礼儀をわきまえ、品性、風格があり人格の高い人をいう。

社会学の立場からは、習慣や法律は外から人間の行為を規制するのに対して、道徳・人倫は、内から人間の行為を律するものとして、いちだんと次元の高いものに考えられている。

教育学の立場からは、道徳(morality)は社会生活のなかで一般に受け入れられている行為のきまりを意味するが、徳育ではたんに一定のきまりに従うだけでなく、より望ましい道徳生活を追求するように導かなくてはならない。^⑨

道徳の見方はさまざまあり、時代によっても異なってくるが、道徳の本質は不変なものであると思う。しかし、いくら不変であるからといっても、その時、その場において共通理解がなされていなければとんでもないことになりかねないのではないだろうか。

小原國芳もいう。「道徳の本質は永劫に変るまい。しかし、その形相は、處と人と時と慣習と、さまざまに変改する。国の東西、時の古今、人の境遇、氣質、動機、時代の精神土地の風習、いろいろなことから定まってくる。

真の自己の生きた道徳が必要である。真に自己を処理し、自己を発見し、道徳を発見し創作し得る人を作りたい。^⑩

多様な道徳の形相は自己を正しくとらえることによって発見することができるといわれるが、自分が人間として、一人の人格をもった人間として今在るということを実感すること自体がとても困難なことではないだろうか。

間瀬正次は、「道徳はこの世に生まれた人間が自己の存在を全うし、各人の人間性を完成し価値ある役割を果しうるようにするものである。このような観点からすると道徳教育はたんに道徳についての知識や理解を与えて、ある徳目についての実践や行為を促すとい

⑦ 『万有百科辞典4 哲学、宗教』小学館 416頁「道徳」。

⑧ 1978年現在、大東文化大学教授。

⑨ 間瀬正次著『実践的道徳教育』明治図書出版株式会社 1978年版 75頁。

⑩ 小原國芳著『教育改造論・自由教育論』玉川大学出版部 昭和54年版 376頁。

うのではなく、人間の内面的な人格形成を目標とする教育のいとなみということが出来る」^⑩人間の内面的な人格形成とは「人間のなすべき正しい行為また望ましい人間の生き方として、善の問題が中心となる。すなわち科学が真理を求め、芸術が美を追求し、宗教が聖を目ざしているように、道德においては善が固有の領域とすることができる。」^⑪という。真善美聖は小原國芳が全人教育に必要な価値として上げているものであり、全人教育の一つの側面としての道德教育は善の教育であるといっているものである。

善について述べる前に、まず小原國芳は人間生活そのものとはどういうことである、といっているか真我に至るために理解を深めたいと思う。

小原國芳は道德とは何かという問に答える。「人間生活そのものは大なる戦です。殊に真人の道德は劍戟砲火の肉弾戦以上の苦闘です。それは二元の葛藤争闘です。アリストテレスの言葉に『神と禽獣には道德なし、道德は人のみにあり』という言葉がありますが、神は純理性的で道德以上の方で、超道德で、道德の必要すらない。禽獣は純本能的で意欲一元ですからこれも何等の葛藤もない。そこに則るべき道はないのですから道德の必要がない。無道德なのです。

吾々人間そのものは半神半獣なのです。人間の本質そのものが、両性を以ってこの世に生を享けたということは永久に人間が二元に苦しまねばならぬ悲しいつらい運命だと思います。

一方には赤い焼きつくような盲目的な底力のある根本動力を有って居るし、そして一方には秋霜烈日、劍のような冷い、真澄みの鏡のようなものを有って居ります。氷炭相容れない。当然そこに大葛藤が起ります。理知と自然、思慮と煩悶。理性と本能。どうしても永久の苦悶はたえないのです。

『実在は矛盾』です。『矛盾を強く感ずる人ほど真人だ』と思います。実に良心とは二律背反です。

人間を分類すると四つになります。第一は理性も意欲も一寸しかないもの、第二は理性が一寸あって意欲が非常に大きいもの、第三は理性が大きくて煩悩が小さいもの、第四は理性も大きくまた煩悩も大きいもの。

吾々が真に要求するものは第四段の人間です。それは理性も非常に大きい、意欲も非常に大きい、両方が大きい。だから矛盾、葛藤、悶え、悩みが大きいのです。しかも、この葛藤が大きければ大きいほど、大きな進歩をするのです。

道德生活とはこの二元の葛藤です。道德はただ人にものみあるのです。そして吾々は理性を以ってその底力強いムズムズした盲目的の意欲を、奔馬を御して行かなければなりません

⑩, ⑪ ⑩と同じ。77頁。

ん。そこに理性の使命があるのです。そこが人間なのです。かくの如く吾々の意慾を導いて行くこと、それが道徳です。道徳とは即ち『自然の理性化』です。煩惱、意慾、本能、自然をば理知で正しく導くことです。

道徳は内の問題であり、二元の葛藤である以上、彼等の心胸深く突入の出来ない人には到底生きた道徳教授は出来ないのです。指導も感化もできません。学生児童一人一人の心の中が手に取る如く分かなければ生徒の甲乙は分らぬ筈です。それにはまず教師自身を曝け出すことです。『わが心割って見せたい西瓜かな』これが私の教育方針です。』^⑩

道徳は人間だけが持ち得るものであるという。そしてそれは二元の葛藤であるというが私たちは自分の歩く道が分らなくなるほど、自分と自分に反するものとの戦いが強くなるという矛盾や、良心の苛責にさいなまれることがある。その矛盾から解き放って下さるのが救い主イエス・キリストなのではないだろうか。神には道徳がないといわれるが、神は私たちに対して相反する対処の仕方をなさる。愛の神であるはずなのに、神は私たちに対して裁きと赦しを与え、怒りと柔和があり、そして義と愛という形をとられる。それは私たちの二元の葛藤と同じ様にイエス・キリストの十字架に如実に現わされているのではないだろうか。

私たちはイエス・キリストの十字架を思うたびに自分のいたらなさを反省し、現実と理想の大きなギャップを感じる。自分のみじめさ、醜くさを本当に悲しむ時、まだまだやるべき善を求めて、心の平和とさらに社会の平和を確保しなければならないと努力する時、その生き方はよしとされるのではないだろうか。

教師である場合、そのように矛盾だらけの自分、もしかしたら子どもたちに馬鹿にされることもあるかもしれない私であることを覚悟して、自分の全人格をさらけ出す時に、そこにこそ真の教育が行なわれるのではないかと思うのである。

4. 善とは何か

キリスト教の場合、聖書に「愛する者よ。悪にならわないうで、善にならいなさい。善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことのない者である。」^⑪とあるように神から出た善を行なうということは、キリストを信じることによって初めて可能になるものであるが、小原國芳はどのように言っているだろうか。

「善とは吾々全人格の要求、衷心の要求、第一義の生活が、最高原理の要求です。といってもそれは決して得て勝手なことを言うのではない。自分の誠心の要求であるならば、

⑩ 「革」79～84頁、「母」195～199頁、「道」218～299頁。

⑪ ヨハネ第三の手紙 11

よしんば他人がそれを何と言おうが断乎としてその道をとって進まなければならない。」^⑮

「善は決して小集的に自己を否定することではない。むしろ大いに自己を生かし真我を發揮するところに善の本質があることを知って欲しい。どこまでも真我の命令に従って、裡なる神命に従う故に、誠信誠意、全我の肯定によって発動する自己發揮でなければならぬ。かくてこそ真にすべての行動に生命があり、価値がある。」^⑯

善は神から出たものであると、聖書では「悪にならわず、善にならなさい」^⑰と、私たちに選ぶ自由をお与えになる。父なる神は私たち人間が自発的に責任をもって善を選ぶようにと配慮されているのである。

小原國芳は道德について論ずる時、頻繁にリップスの言葉を引用しているが、リップスは善をどのようにとらえているのだろうか。彼の著書『倫理学の根本問題』によると、

「この世で実現せらるべき道德的目的がある。それらを総括して『善』と名づける。だから善はあるべきものであり、そして我々によって実現さるべきものである。それで、ある行為がこの世において善の実現に貢献する限り、それは疑いもなく価値を、しかも道德的価値をもつ。すなわちこのような行為があらわれるのは、道德的立場から見て喜ばしいことである。その行為を作り出すから善である。」^⑱ さらに、

「善なる心情、またはさらに一般的に言えば、人格における善なるものまたは価値あるものが、必然的に道德的意欲の根拠である。さらに今我々に分かったことは、人格におけるこの価値あるものは、同時に道德的意欲の本来の対象である。道德的意欲は、善なるものまたは道德的人格が幸福に自己を生かきることを目標とする。だが『善なるもの』が全力を尽し得るためには、それが実際に存在しなければならない。そしてそのような善なるものが存在すればする程、または、このような価値ある人格的なものが成立すればする程ますますこのような善なるものまたは価値ある人格的なものが、十分力を尽すことの可能性が確実となるのである。だからこの善なるものの存在ということ、そしてこのことこそまず第一に、道德的意欲の目標でなければならない。

ある価値を認識するということは、幸福になるということである。価値感情は快の感情である。私および他人の人格における価値あるものまた、私に幸福を与えるものである。

人間の使命は、彼ら自身が幸福となりそして他人を幸福にするということではなくて、彼ら自身善となり、そして彼らによって他人が善となるということ、また彼らが善である

^⑮ 「革」67頁。「道」207頁。

^⑯ 「実」29頁。

^⑰ ⑭と同じ。

^⑱ リップス著 原著名“Die ethischen Grundfragen”, (5 Aufag, 1927) 島田四郎訳『倫理学の根本問題』玉川大学出版部 昭和48年版 86頁。

限り、彼ら自身幸福となり、そして彼らによって他人が幸福になるということにあるのである。」^⑩

全精神を尽してそこに善が見い出され、そのことによって、他人をも幸福にするということ、ここで初めの問題提起のところにもどり、人は他者との関係においてのみ人間でありうるということにはならないだろうか。そして人間が社会人として存在するためには道徳が絶対に必要であるということに帰結しはしないだろうか。

二．道徳と宗教の関係

ここで、小原國芳が述べているように道徳を人間社会のものだけとせず、神との関わりであると力説する鈴木弼美と三浦修吾の説を引用してみよう。

まず、鈴木弼美^⑪は彼の著書『真理と信仰』^⑫で道徳は社会秩序を保つための人間の間だけの約束ではないとする。即ち、

「人間関係の真理は、道徳的真理であります。道徳は単なる社会秩序を保つための人間の間での約束ではありません。超人間的な至上命令であります。自然科学的真理が、超人間的客観的な真理であると同じように宇宙の真理であります。道徳的真理は真実という風に言われますが、同じ事であります。真理に従って生きる事が真実であります。『神は真理である』^⑬とそう聖書に書いてあります。神は真理そのものであります。神は愛なりといってもそれは神の属性をあらわすことではなく、神は愛そのものであることを示しております。その如くに、神は真理そのものであります。」^⑭と。宗教が神と人との関係から隣人との関係に言及しているのと反対に道徳は隣人との関係から神との関係へとたどりつくものである。さらに聖書では道徳をどのように示しているかについて三浦修吾^⑮は次のように述べている。「権利と義務、そのいずれかを重くとるかによって、性格をつくる場合の第一歩が始まる。義務の観念が、権利の念よりも、ずっと上に出るのでなければ、人は本当に道徳的になることは出来ない。けれど、キリストによって明らかにせられたのは、そのいずれでもない。キリストによって示された人間の行路を、務めることはわが誉れであり、わが喜びであるという念が、権利や義務の念よりも、ずっと大きくなる時に、

⑩ ⑩と同じ。112～113頁。

⑪ 1899年～、大月市生れ。1980年現在山形県基督教独立学園高等学校長。

⑫ キリスト教図書株式会社 1979年版。

⑬ ローマ人への手紙14章6節。

⑭ 鈴木弼美著『真理と信仰』キリスト教図書株式会社 1979年版 57頁。

⑮ 明治8年～大正9年 福岡県浮羽郡吉井町生れ、東京高等師範英語科卒業。デ・アミーチス著『クオレ』の翻訳『愛の学校』がある。

初めて踏み出されるのである。人が自分に求めるよりはより以上の事を人のために尽すことという心。七度を七十倍にして許容すること。人が自分を責め、罵り、自分に害を加える時に、その人のために祈ること、言い換えれば、何人も自分に要求すべき権利をもっていない時に、人のために働くこと、自分をこの世に遣わされた神の心となすことが、自分の食物であり、飲物であると感じること。それによって開かれた路を進むことで、これが第二里を行く心である。

そして、この心の真髄は愛である。愛とは溢るる好意をもって人のために尽すことである。人に仕えることを喜ぶ念が、権利や義務の念を超えて溢れ、それらを溺らしてしまうときに、人はキリストの道、第二里の踏を歩き得たのである。道徳生活の真の価値は、溢るるばかりの好意をもって、人のために尽すという心の中に蔵せられている。

第二里を行くという愛の心を離れては、細かな道徳上の教訓は、人を活かすことは出来ない。神の愛は、人の生命の底を流れている。これが活ける水となって、人の行為の上に進り出る。その愛の泉はわれから進んで奉仕するのに、嘗て尽きるということはないものである。』⑥

この「第二里を行く」という言葉は小原國芳のモットーであり、玉川学園のモットーでもある。他から強いられて物事を行なうのではなく、自分から進んで行なうことの大切さ、奉仕の精神を示すものである。ここでもう一人、奉仕の精神について語っている人を紹介したい。内藤正隆⑦は道徳の公分母、即ちすべての人たちが道徳に対して共通理解としなければならないものは、キリストの救いであると、次のように述べている。

「マタイによる福音書5、6、7章はキリスト教の道徳訓だと言われています。その中でも黄金律として有名な言葉は、『何事も人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。』⑧であると申します。

しかし、キリスト教の道徳は決して単なる人の道ではありません。道徳を真に人の心の中に実践する力として植え付けてくれるものは、むしろ人の道を越えた所になければなりません。或る人は『キリスト教は単なる道徳の書ではない。それは信仰の書である。信仰の書であるが故にそれはまた真に道徳の書である』ということを力説し、それが証拠には『真の道徳（人と人との関係）は神と人との関係を正しくしない所から生まれて来ないのではないか。神はその独り子キリストに対してすら道徳的でなかった。』と鋭く指摘しております。その意味は、人類を救うためにキリストが十字架にかかって処刑されたのは、

⑥ 三浦修吾著『生命の教育』玉川大学出版部 昭和51年版 191～202頁。

⑦ 元山梨英和学院 高等学校長 昭和37年没。

⑧ マタイによる福音書7章12節。

キリストの意志であるよりはキリストの父なる神の御意志であられたからであります。

『アブラハムが独り子イサクをモレアの山で焼祭として献げようとした』^⑨のも神の命令にアブラハムが従ったためでありまして、アブラハムはイサクに対して道徳的であったとは言われません。それにもかかわらず、この神の一見道徳的でないように思われる事実から、人類の救い歴史は展開されたのであります。否、キリスト教のしぶとい奉仕の倫理が生まれて来たのです。私共の道徳の公分母はやはりキリストの救いということではないでしょうか。』^⑩

私はこれまでキリスト教の立場に立って、宗教と道徳の関係を見てきたが、この世の中はキリスト者だけが存在するわけではないし、社会生活上、他の宗教の存在をも理解せねばならぬと思うのであるが、私たち社会生活を営んでいくうちに善・不善を感じるのは良心である。特定の信仰をもっていない人でも良心は持っているのではないか。宗教家はそれを神の声とするだろうが、小原國芳はどのようにとらえているだろうか。

「良心とはわれわれの心意全体が道徳活動を営む時の意識状態である。つまり道徳意識である。心意全体の働きである。つまりは学問に対して働けば学的良心であり、芸術に対して働けば美的良心であり、道徳に対して働けば道徳的良心であり、宗教に対して働けば宗教的良心である。行為の善悪に対するわれわれの全人格の命令が、すなわち善的ゾルレン Sollen が道徳的良心である。普通良心ということは、特に道徳上の良心のみに使われ神聖視されるのは、道徳なるものが一切の人事現象中最も吾人に利害関係が大であるととして格別に高調されたためである。』^⑪ さらに小原國芳は「道徳は実にベシなのです。神仏の命令、止むに止まれぬ良心の命令なのです。Sollen なのです。』^⑫ と断言しておられる。

小原がいう道徳は神仏の命令、止むに止まれぬ良心の命令だということから、仏教の立場では宗教と道徳の関係をどのように見ているだろうか。そしてそのことが教育にどのように関わっていくのかを西元宗助^⑬の言葉を引用してみよう。

「教育の本質といいますのは、教育する者とされる者との間における命と命との交渉という問題が中心であり、したがってそこには当然、敬愛信という、最も宗教的なことが問題にならざるをえない。とすれば、教育がおこなわれていくということ、その場合の教育精神といいますものは、どこかで宗教的なものに触れなければ、ほんとうの教育はおこなわれ難い。教育とはそういうものであります。』^⑭ さらに「われわれが真面目に真剣に教

⑨ 創世記22章 1～14節。

⑩ 内藤正隆著『信仰と教育』創文社 昭和42年版 128～129頁。

⑪ 「実」49頁。

⑫ 「母」219頁。

⑬ 1909年～、鹿児島生れ。1978年現在京都産業大学教授。

⑭ 西元宗助著『宗教と教育のあいだ』教育新潮社 1978年版 82頁。

育の問題にとりくんだ場合、必ず自己そのものが問題となる。自分そのものが問題となりますと、必ずそこに宗教が自分の切実な問題とならざるをえない。……中略……

切実に自力無功ということを教えられたのであります。でも自力無功と知られて、どうなったか。自力無功と知らされて、ただ南無阿弥陀仏と本願力に乗托し、及ばずながら、できるだけのことをやらせていただこうと、立ちあがっていく境涯があたえられるのであります。じっさい自力無功と気づかされるということは、自ずから我がすたってゆく世界であります。他力ということは自ずからにして無我とならしめていく世界であります。主体性がありながら、我がなくなっていく。親鸞聖人のひらかれた世界といえますものは、このような境涯であるようであります。』^⑬

これまで多くの引用をもって宗教と道德の関係を見てきたが、それぞれの立場から道德も教育も、内なる自己に従うことによって初めて生かされるものであり、内なる自己の確立にはキリスト教の場合は、聖書を通して、神の教えを聴きとることにあり、仏教においてもまた経典を通して仏の教えを学ぶことの大切さを知らされたのである。

キリスト教を基にするにしても、仏教を基にするにしても、教育はようするに人間（教師それぞれ）の生きざまが問題になってくるのではないだろうか。さらに、教えるものと教えられるものとの命と命の対決であることをしっかりと自覚しなければ、よい教育はなされず、おざなりな無責任なものになってしまうのではないだろうか。

三. 道德教育の目的

道德教育、道德の根本問題を考えることによって、道德・道德教育が何故必要であるかが浮上してきたと思うのであるが、さらに小原國芳によってそれらが目的とするものは何かを明確にしてみたい。

『『品性陶冶の三方面の帰趨』

知的要求としては道德上の知識を与え、正邪善悪に関する概念を明晰正確にし、よく事に処して事理を弁え、正・非正を識別判断する健全なる能力を有し、進んでは吾人の住んでおる周囲すなわち家庭を社会を国家を世界を改造するに足る人世の法則に対する有機的見解を持ち、より高き道德的理想を有することが望ましいことである。

感情方面からいっては、善行美德を聴かして以て正善を愛し邪悪を悪むの心情を、殊に美しい純潔なる心情を涵養することが必要である。そして

意志的方面からいえば、正善と見たらどこまでも実行せざれば止まず、邪悪と見たらまた強く抵抗もしてどこまでも戦い得る底の不屈不撓の戦闘力を養成することの必要である

^⑬ ⑭と同じ。102頁。

ことは言うまでもない。

以上の三者何れを欠いてもいかぬと思う。道徳は最後は実行を訴えねばならぬからして意志の決行力も必要だし、殊に邪悪や迫害、苦難や誘惑と戦う強い鉄の如き意志も必要である。また感情はわれわれの行動を左右する大きな力でもあるから、道徳的情操の涵養も必要である。殊に純化されたる美しい敏感なる情操を特に必要とする。この三者がうまく調和して統一されることを要求する。そしてそれらの何れにも片寄らない『人』を要求する。」^①

道徳教育は知情意の三方面が一体化されたところにその成果があらわれるのであるが、それは実際にその人の人格を作り上げ、その人がその人の生活の中に生き生きと実行することによって、他から認められるようになるのではないだろうか。

ペスタロッチ (J. H. Pestalozzi 1746-1827) は、彼の墓碑銘に書かれているように「すべてを他人のために、己には何もかもせず。」^②と愛の仕事に徹した人であることは小原國芳が繰り返し強調されたことである。ペスタロッチの教育の目的は真の人間を陶冶しようとしたものであり、このことは小原國芳で求める『ホントの人』へと繋がるものではないだろうか。

「ペスタロッチの教育の目的は、人間の三天賦として頭と手と心臓とのうち、常に心臓を土台とする道徳宗教的な調和人を作ることにあった。したがってその教育内容とは、その根本において人間性における『自然』の法則に従うことであった。それゆえに人間性の本質である自然性にさおさしつつ、各個人の具体的生活によって力と信念と魂とのある真の人間を陶冶しようとしたのである。」^③

これまで見てきて人間教育の目的、道徳教育の目的である真の人格形成は宗教を通して自ずから達成されるものであるということにはならないであろうか。

即ち、「宗教教育は宗教教授では無く宗教的教育であって、徳育の完成貫遂を期待する作業である。宗教の形式面即ち経文祈禱等の指導には一切触れず、宗教の在り方と宗教の真理を教え、人間本性に潜む宗教心を開発覚醒せしめ、宗教的情操特に敬虔心に充ち生涯真の人間として有意義と働く人物養成であって、宗教の形式方面に知らぬことがあっても有為の人物であれば、目的を達した訳である。」^④

多くの人は信仰を持っていると思う。それを表面に出すか、心の中にひめておくかの違

① 「実」39～40頁。

② “Alles für Andere für sich Nichts” 福島政雄著『ペスタロッチ』福村書店 1964年版 297頁。

③ 坂東藤太郎著『ペスタロッチの道徳宗教教育の研究』協同出版株式会社 昭和42年版 1頁。

④ 藤本一雄著『道徳の根本問題』明治図書 1963年版 41頁。

いはあるが、人はすべて人生に対して希望を持ち、明るい生活を営むように努力し、自分が信じているところの絶対者への畏敬の念を持ち、物事への思惟を深め、責任遂行をなすように努めること、それは人間の最高の理想であり、そのことはすでに宗教教育となっているのではないだろうか。

おわりに

私たちは自分を見つめ、自己と対決することによって、隣人の存在を知り、絶対者の存在を知る。隣人を意識する時、さらに自分との違いに気づき、比較するようになる。私たちは優れた人物に出会い、自己を反省し努力すること、そのためには努めて読書をし、真理を求めて熟慮しつつ、実行せずにはおれない。

私は小原國芳がこれほどまでに道德と宗教を結びつけているとは思っていなかった。彼の宗教教育を学んだ折、彼の信仰がこれほどまでに神を求めていることが理解できなかったのであるが、労作教育と道德教育を探り続けているうちに彼の信仰の確実さは驚くばかりであることに気がついたのである。このような信仰の力があつたればこそ、玉川学園をつくり出す力が備わり、玉川学園の現在があるのではないだろうか。

道德教育それは龐大な課題である。今回は、そのほんの一部である道德教育の根本問題（人生観、人生の目的と人格価値、道德とは何か、善とは何か）と宗教との関係、そして道德教育の目的とされるものを多くの引用によって学ぶことができたのである。

道德は人と人との関係から、神と人との関係へ向うこと、それは自己をとらえることによって可能となるという論理、これを玉川学園の道德教育の實際を具体的に研究することが次回の課題として残された。

三浦修吾の「人間生活の真の意義は、目標を定むるということにはなくして、刻々に遭遇する境遇にいかにかゝつていくかということにある。到達すべき目的地にあるのではなくして、歩々足を運ぶところにある。

人生は断えざる進歩であり、流動である。流れ動き、展びてゆくところに、人生の姿がある。そこには不断の苦闘が強いられ、余儀なくされる。戦いそのものが人生の姿であつて、『平定』はただ空想の上のみ描かれるものである。』^①という言葉に励まされながら、遅々として進まぬ歩みを人として生きるために、自分を生かして下さる方のために進めていきたいと思うものである。

(1980.10.25)

① 三浦修吾著『生命の教育』玉川大学出版部 昭和51年版 85頁。

引用文献ならびに参考文献

- | | 省略記号 |
|------------------------------|------------|
| 小原國芳著 | |
| 『道德教育論』 玉川大学出版部 昭和44年版 | 「道」 頁 |
| 『道德教授革新論』 | 53年版 「革」 頁 |
| 『母のための教育学』 | 51年版 「母」 頁 |
| 『道德教授の実際(1)』 | 50年版 「実」 頁 |
| 『教育改造論・自由教育論』 | 54年版 「自」 頁 |
| リップス著, 島田四郎訳 | |
| 『倫理学の根本問題』 玉川大学出版部 昭和48年版 | |
| ケルシェンシュタイナー著, 東岸克好・小林澄兄訳 | |
| 『労作学校の概念』 玉川大学出版部 昭和53年版 | |
| 間瀬正次著 | |
| 『実践的道德教育』 明治図書出版株式会社 1978年版 | |
| 鈴木彌美著 | |
| 『真理と信仰』 キリスト教図書出版社 1979年版 | |
| 三浦修吾著 | |
| 『生命の教育』 玉川大学出版部 昭和51年版 | |
| 内藤正隆著 | |
| 『信仰と教育』 創文社 昭和42年版 | |
| 西元宗助著 | |
| 『宗教と教育のあいだ』 教育新潮社 1978年版 | |
| 藤本一雄著 | |
| 『道德の根本問題』 明治図書出版株式会社 1963年版 | |
| 福島政雄著 | |
| 『ペスタロッチ』 福村書店 1964年版 | |
| 相賀徹夫編 | |
| 『万有百科大事典4 哲学, 宗教』 小学館 昭和49年版 | |
| 田中美知太郎編 | |
| 『宗教と倫理』 人文書院 昭和54年版 | |
| シュプランガー著, 浜田正彦訳 | |
| 『教育者の道』 玉川大学出版部 和昭47年版 | |
| O・F・ボルノー著, 岡本英明訳 | |
| 『道德の人間的エッセイ』 玉川大学出版部 1978年版 | |
| O・F・ボルノー著, 浜田正彦訳 | |
| 『哲学的教育学入門』 玉川大学出版部 1978年版 | |

(1980.10.25 受付)